

「環境学習プログラム体系づくり事業」 これまでの議論まとめ資料

H21.5

1. 本事業の達成目標や課題は何か？

「阿賀野川流域の環境」と「人々」との間の“もやい直し”の達成が目標

- 「流域の環境」が対象なので、新潟水俣病の発生もその教訓も無視できない。
- 「人々」とは、流域住民を中心に、流域の訪問者や次世代の子どもなどが対象。
- 「もやい直し」とは、今までの関係を反省し、これからの新しい関係を築くこと。

今までの関係の何が問題だったか？

- 流域では、新潟水俣病への反省的検証がなされてこなかった。
- 流域では、新潟水俣病の教訓を考えてみる機会も作られてこなかった。
- ◎ 流域の自然環境と人々との付き合い方の変化を考える機会もあまりなかった。
→ そもそも、新潟水俣病に触れずに、流域の環境に取り組んで良いものか？

その問題にある背景は何か？

★流域住民の心理的・状況的な背景★

- 昔も今も、できれば新潟水俣病と向き合いたくない。
- 向き合わざるを得なかった水俣市と違い、向き合わなくても生活できた。
- 今さら新潟水俣病と向き合っても、マイナスにしか作用しないのでは？
- ◎ 今の豊かな生活を失いたくない。環境を考えずとも表面上何の不便もない。
- ◎ 日本社会や生活環境が、人間を自然や環境から遠ざける方向で急激に変化。

ポイントと課題

- まずは、「環境」「社会」「新潟水俣病」「流域」の専門家に検証・考察してもらう。
→ 新潟水俣病の検証や考察から、普遍的な教訓（環境・人間）が導き出せないか？
- 流域住民が、新潟水俣病を踏まえて、流域の環境と新しい関係を築いてもらう。
→ 消極的な流域住民に、どう考えてもらい、どんな関係を築いていってもらおうか？

2. 問題解決に向けた方向性は？

★問題解決の糸口★

新潟水俣病や環境に対する、流域(住民)の消極性をどう積極性に変えるか？

○新潟水俣病を、マイナスからプラスに転換できないか？

◎環境学習を軸にした、流域独自の「地域づくり」が行えないか？



阿賀野川流域地域を、フィールド全体を舞台として、新潟水俣病の教訓や流域の地域性を存分に活かした「環境学習」のメッカにしてはどうか？

- 「日本で唯一」と言える「独自性」を持たせた環境学習にしたい。
- そのためには、阿賀野川流域だからこそ伝えられる「大切な何か」が重要。
- それは、これからの生活で大切にしていきたい「流域地域の価値観」になるべきものなので、なるべく流域住民自身が関与していく必要がある。

具体的には…

○環境学習の構想

新潟水俣病含め、流域には重要な地域資源が多数ある。それらをつなぎ合わせると、日本で唯一「日本環境史の変遷（鉱害→公害→現在の問題）」が辿って（その裏側の「日本発達史の変遷（殖産興業→高度経済成長→豊かな生活）」という深層まで辿って）学べる環境学習の舞台ができるのでは…。

○流域の訪問者（子どもたちや人々）

流域の独自性を体験し学んでもらい、最終的に流域だからこそ伝えられる「大切な価値観」を持ち帰ってもらえれば…。

○流域住民（※特に将来の地域づくりを担う地域の若者）

環境学習づくりを通して、あるいは、訪問者との交流を通じて、新潟水俣病を含めた、流域の環境や地域性への理解を深めると共に、そうした流域の独自性を活かした地域づくりや、流域への誇りにつながっていけば…。

3. 流域を舞台とした環境学習の基本的構想として…

基本的なイメージ：「日本の環境史の変遷」をたどって学べる場

現状 流域では、環境資源・地域資源が個別に散在

上流 昭電跡地、排水口、
旧鹿瀬町、草倉銅山、他鉱山
ブナ林、体験学習…など

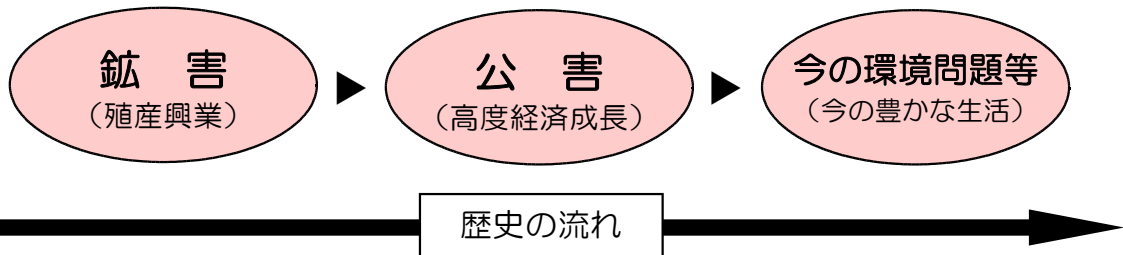
中流 水俣地蔵、瓢湖、
トゲソの里、吉田東伍、里芋
安田ヨーグルト、チュールップ…など

下流 松浜、津島屋、
一日市、ふれあい館、
松浜漁協の漁業…など

その他 流域の「自然」、「景観」、「名所・旧跡」、「祭・行事」、「温泉・観光・娯楽」、阿賀野川に生息する生物、流域に受け継がれる持続可能な生活の知恵・自然との付き合い方…など



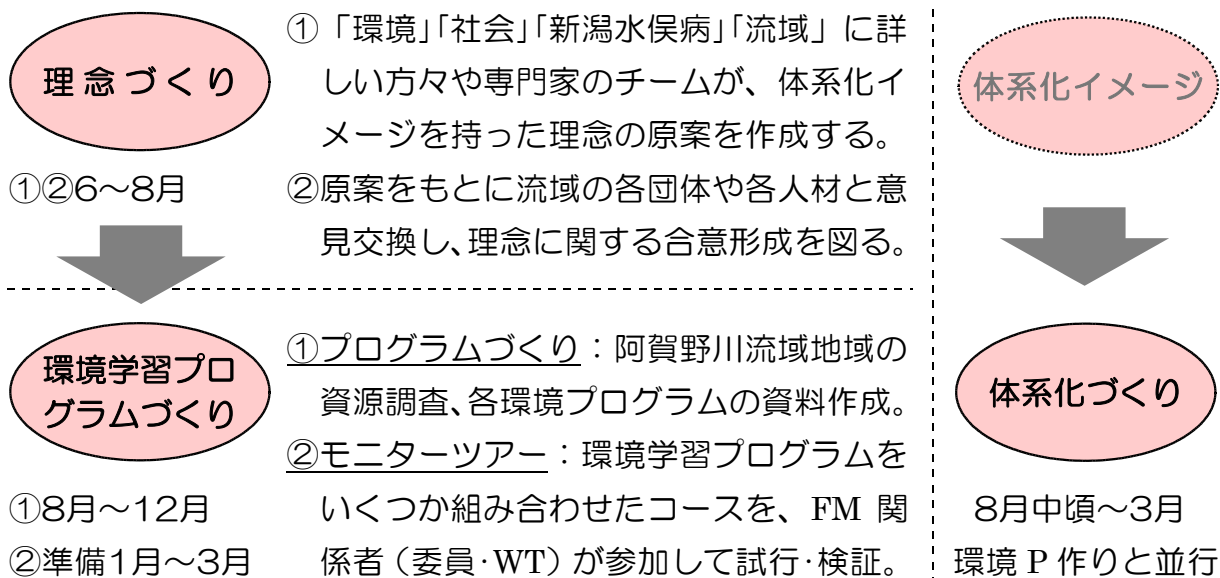
構想 「日本の環境史の変遷」という観点から、流域資源を整理・再構築



| | | | |
|------|--|------------------------------|--|
| 流域資源 | ○草倉銅山 (足尾銅山も…) ○その他鉱山…等 ※草倉も足尾も、古河財閥の経営。草倉の稼ぎが足尾の苦しい経営を支えた。 | ○新潟水俣病関連 ○昭和電工 ○旧鹿瀬町…等 | ○NPO など諸団体が行う、環境や地域づくり活動 〔トゲソ、体験学習、グリーンツーリズム〕 ○流域の自然(上流ブナ林等) ○阿賀野川に生息する生物 ○流域の景観 ○流域に受け継がれる持続可能な生活の知恵…等 |
| 現象 | ○鉱害(煙害・鉱毒) | ○四大公害の1つ | ○現在の環境問題・過疎問題 |
| 背景 | ○産産興業の発展 | ○高度経済成長 | ○現在の豊かな生活 |

4. 本事業の流れ

本年度の事業の流れ



WT メンバー

理念・体系化 WT

- ①環境系学問・社会学等の専門家、流域の自然や新潟水俣病に詳しい方
- ②環境や社会学を学ぶ学生や関心ある若者



環境 P 策定 WT

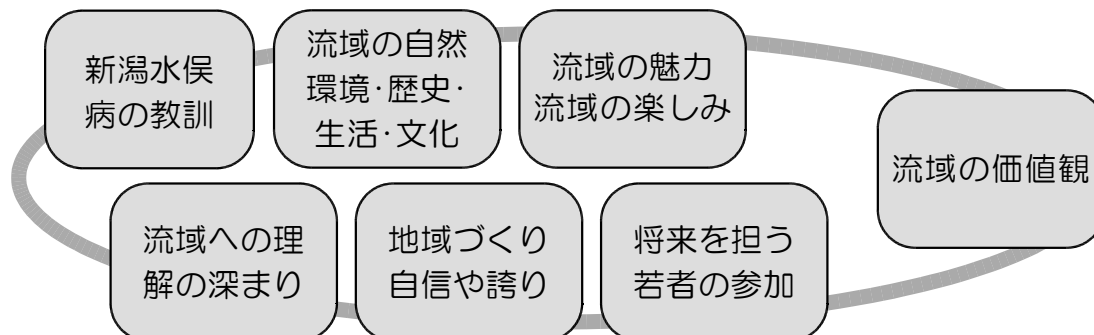
- 理念 WT より人数は少なく…
- しかし、②の学生や若者の人数をより多くしたい。

その他事業のポイント

- モニターツアー：本年度は準備にとどめ、来年度以降実施する。
 - スポットガイド：地元参加の理念づくり、環境資源調査、ロバダン！など、様々な機会を捉えて、人材を発掘していく。
 - ガイドブック：環境学習プログラム体系（→目次）に合わせて、各環境プログラムの個別資料（→内容）から作成していく。来年度以降か？
-
- システムとしての運営可能性の検討：システム（や組織）として持続的に運営可能か検討が必要。①最重要顧客の開拓、②運営組織（設立 or 委託）検討、③運営可能性のシュミレーション、④システム細部構築…等の観点か？

5. 理念づくりの流れ

検討素材



WT 会合の流れ

◆会合ルール◆

- ① 事前に、質問票記入や資料作成あり。
- ② 多忙・遠方の場合、「文書参加」可。

(1) 理念の原案づくり (6月～7月上旬)

専門家や流域に詳しい方々などが集まり、理念の原案を作成する。

- ① 環境学習一般についての基本認識の確認 (会合回数 1～2回)
- ② 本理念について、各メンバーの考え方を披露・確認 (会合回数 1～2回)
- ③ 各メンバーの意見を集約して、理念の原案を作成 (会合回数 1～2回)

(2) 原案を基に、地域との合意形成 (7月上旬～8月中頃)

この環境学習の理念は、阿賀野川流域に暮らす人たちが、これから生きていく上で大切にしたいもの…謂わば「流域地域の価値観」となるようなものとも言えるので、阿賀野川流域の団体や人々とは合意形成を図っておきたい。(複数回)

流域の諸団体

行政、新潟水俣病患者、森林組合、漁業組合、農協、商工会、NPO等諸団体、若者たちなど

効果 その1 新潟水俣病含め、流域に対する理解を深め合う機会となる。

効果 その2 後にスポットガイドの発掘に至る端緒となりうる。

(3) 理念すり合わせ結果の確認・完成 (8月末) (会合回数 1回)